カナダ便り

インタナショナリスト

新渡戸稲造に関心

ジョージ・オオシロ

新渡戸稲造が亡くなったのは、ブリティッシュ・コロンビア州ビクトリアである。南部藩士として盛岡に生まれた新渡戸は、よく知られているように、札幌農学校を卒業して、〝太平洋の橋〟となるべく東京帝大で英文学と理財統計学を修め、その後教育者としてまた国際連盟事務局次長などとして活躍する。

その新渡戸が世界的な保養地として有名なアルバータ州バンフで開かれた太平洋問題調査会の国際会議に出席し、病を得て入院先のジュビリー病院で七十一年の生涯を閉じたのは、一九三三年のことであった。

新渡戸と親交のあったブリティッシュ・コロンビア大学学長のノーマン・マッケンジー氏は、「平和の使徒」として深く尊敬していた新渡戸を讃えて、構内に「新渡戸記念庭園」を設けた。この日本式のすばらしい庭園は、わたしが研究生活を送っているアジア・センターのすぐそばにある。

わたしと新渡戸稲造との出合いは、一九七五年、国際基督教大学で武田清子教授の日本知識史の講義を聴講したときに始まる。私は日系人として、特に〝二つの世界〟を有する人間として、新渡戸にひかれた。その後、大阪のYMCAで英語を教えていたとき、幸運にも大阪市大の佐藤全弘教授に出会った。佐藤教授は新しい新渡戸稲造全集の編者で、新渡戸や内村鑑三に関するいろいろな著作を紹介して下さった。ブリティッシュ・コロンビア大学を選んだのも、先生のお勧めによる。現在、『戦前日本における国際主義者・新渡戸稲造』という題で、博士論文をまとめているところである。

日本の近代史のなかで、新渡戸稲造は謎めいた人物となっている。戦前の偉大な自由主義者で国際主義者として賞讃される一方で、帝国主義者、日本軍国主義の弁護者、さらには狡猾なペテン師とまで悪口を言われる。ごくわずかの例外はあるが、新渡戸に関する記述は、ほとんどがこの両極端のいずれかに属するといってよい。

教育者としての新渡戸は、矢内原忠雄、高木八尺、南原繁、鶴見祐輔、森戸辰男、田中耕太郎といった戦後の指導者に多大の影響を及ぼした。彼が、精神形成者として福沢諭吉の次に位置づけられ、賢者的、父親的な人物としてのイメージで見られるのは、その点に負うところが大きい。国際的な人物としての品性を表す洗練された口調と完璧な身のこなし——彼は明治および大正時代の青年にとって、鏡とすべききわめて魅力的な人物であった。

『新渡戸博士追憶集』や矢内原の『余の尊敬する人物』、高木の『先駆者の足跡』といった、彼の崇拝者による著作に描かれたこの新渡戸像は、その後のすべての新渡戸研究に影響を与えることになる。新渡戸についての標準的な伝記も、同じように彼を理想化したものになっている。

しかし、新渡戸には敵もいた。植民地統治者（台湾総督府技師）、第一高等学校（東京大学教養学部の前身）校長、京都および東京両帝大の教授という、エリート官僚機構の中における経歴をもつ彼は、権力の外側にいる人たちにとっては胡散臭かった。しかも、台湾の植民地化で腕を振るった後藤新平や小玉源太郎といった実力者たちとの交流は、新渡戸の帝国主義者としてのイメージは、いまでも強く残っているようで、京都大学の飯沼名誉教授は、一九八一年七月七日のサンケイ新聞に、新五千円札の肖像に新渡戸を選んだことを批判する一文を書いておられる。

新渡戸についての相反するイメージは、北米でも見受けられる。例えば日本勤務の経験もあるカナダの外交官・故キーンリーサイド氏は、著書の中で新渡戸を「にせものの自由主義者」と呼び、カリフォルニア大学のアール・キンマウス教授（日本史）も新渡戸は純粋なクリスチャンではなく、エッセイ集『修養』を書いたのもお金のためであった、と匂わせている。

新渡戸の業績や人生に関する異った見解をすっきりさせるため、ブリティッシュ・コロンビア大学のジョン・ハウズ教授と私は、今年の五月、この大学で開催された新渡戸・大平（故大平首相）記念日本研究会議でパネル・ディスカッションを開いた。日本、カナダ、米国から十一人の研究者が新渡戸のさまざまな側面について発表した論文は、近いうち一冊の本にまとめられて発表される予定である。

（ブリティッシュ・コロンビア大学大学院学生）